

## 2024 年度

### ネバーランドデイサービスセンター事業計画書

- <事業の種類> 介護保険法による通所介護事業  
介護保険法による介護予防通所介護事業（合計定員40名）

#### <運営方針>

在宅の要支援者・要介護者に対して、意欲・自尊心の向上、心理的安定への働きかけを行いながら、健康状態の把握・維持、生活機能の維持・向上、社会的孤立感の解消、家族の負担軽減等を図る。また、自立支援・重度化の予防により、在宅での生活が継続でき、利用者の自己実現の達成を支援する。

#### <SWOT 分析>

##### 【強み】 内的要因

- イ) 利用者の在宅生活が継続できるよう個別の課題改善に向けての対応に努めている。
- ロ) 職員が仕事と子育て等、家庭との両立が可能となる環境が整備されている。
- ハ) 施設が明るく開放的な環境にあり、屋内で安全に歩行ができる広さもある為、活動量が確保しやすい。
- 二) 利用者間のコミュニケーションが良好で活発である。
- ホ) 男性利用者も多く、利用に抵抗のある男性もサービス利用に繋がっている。
- ヘ) 施設手作りのお弁当の持ち帰りサービスを実施しており、食事の準備が困難な方の低栄養の予防ができ、また、家族の負担軽減となり喜ばれている。
- ト) 特別養護老人ホーム併設型のデイサービスである。
- チ) 利用者のデータ入力など IT 化により業務負荷が軽減され、サービスの質が向上できている。（紙媒体への記録→電子媒体への記録に移行することで業務の効率が上がり、コミュニケーションの機会が増えるなど利用者に関わる時間が増えた）
- リ) 感染症や災害が発生した場合であっても、利用者に必要なサービスが安定的・継続的に提供されることが求められている。指針とマニュアルの策定 職員等を対象とした研修の実施等、安心して受け入れできる環境が整備されている。また、平時から医療機関と連携し、助言や支援を受けることができる仕組みが構築できている。

##### 【弱み】 内的要因

- イ) サービス提供体制強化加算が算定できる基準に達しておらず減収に繋がっている。（介護職員の介護福祉士資格取得率が低い。勤務年数が少ない等）
- ロ) 個別機能訓練加算について、看護職員の不足により上位の加算が算定できていない。
- ハ) デイサービスは数が多く競合する事業所が多い。夜勤手当がなく賃金が安くなる傾向もあり職員の人材確保が難しい。

## 【機会】 外的要因

- イ) 少子高齢化や女性の社会進出などの社会変化もあり、親と同居する世帯が減少している。自宅で親を介護する従来のスタイルから必要に応じて介護サービスを利用するというスタイルが一般的となり、利用者が在宅での暮らしを継続しながら、サービスを利用できる通所介護の需要は増している。
- ロ) 2025年以降は団塊の世代が後期高齢者に移行する。そのため、介護保険サービスの入り口である通所介護の利用を希望される方の増加が見込まれる。

## 【脅威】 外的要因

- イ) 予防事業の要介護者利用可能により、将来的に軽度者の総合事業への移行が考えられる。場合によっては介護報酬の引き下げが考えられるため、事業所の運営がより厳しいものになることが懸念される。
- ロ) 感染症の発生により職員不足や休業による減収が予想される。
- ハ) 介護報酬改定により、介護サービス利用費の2割を自己負担する高齢者の対象を広げる方針が示されており、利用者負担が増えることでサービスの利用頻度が減少する可能性が懸念される。

## <事業計画>

(利用者の個別ニーズに対応したケアを実施し、自立に向けた支援を行う。)

### ① 入浴

在宅において入浴が困難な方や、安全が確保できない方に対して、見守りのある環境で困難動作の介助を行い身体を清潔に保つ。また、気持ちよく入浴して頂くことで、心身のリフレッシュを図る。加えて、在宅で安全な入浴が叶うよう動作指導や助言等も行う。一般浴と椅子浴があり介護度が高い利用者にも、安全に入浴が実施できる。

### ② 排泄

利用者の排泄のタイミングに留意し、その人の有する能力を活用しながら困難動作の介助を行う。

### ③ 食事

季節を感じられるメニュー・栄養バランスを考えたメニューを提供し、食べる事の楽しみを感じて頂きながら健康状態の維持を図る。

また、利用者の嚥下能力に合わせた形態の食事を提供し、必要に応じて困難動作の介助を行う。

### ④ 機能訓練

自立支援・重度化防止に向けて、現状の課題を踏まえ、生活動作に着目したプログラムを作成し、マシンリハビリ・各種体操・各種訓練を実施する。身体機能の自立だけが目的ではなく、身体機能のアップにより利用者の自己実現や豊かな生活に繋がることを目的に身体機能の維持向上を図る。脳トレーニング・デュアルタスク(二重課題)を実施し認知症予防を図る。利用者にはわかりやすく簡単なリハビリ評価表を定期的に発行し、モチベーションのアップを図る。

### ⑤ レクリエーション

集団で他者とのコミュニケーションを図りながら、楽しく活気ある活動とし、運動量を確保する。

<年間行事>

4月	お花見	10月	運動会
5月	お茶会	11月	紅葉狩り
6月	うちわ作り	12月	クリスマス会
7月	七夕会	1月	新年会
8月	納涼祭	2月	バレンタイン企画
9月	敬老会	3月	ひな祭り

<日課>

時 間	項 目	内 容
8:00	迎え	乗車前に検温 消毒を実施。
9:00	到着	手洗い うがい 消毒
9:00	健康チェック	血圧・体温・脈拍の測定及び、日々の変化に留意し当日の体調のチェックを行う。
10:00	入 浴	身体状態に合わせて、一般浴・椅子浴にて実施。
	脳トレーニング	脳トレプリント パズル等
	個別機能訓練 個別レクリエーション	マシントレーニング (各個別機能訓練計画メニュー) 塗り絵、硬筆練習、オセロ・トランプ等のゲーム 生け花、雑誌
11:45	新聞読み	時事情報の提供を行い、社会への関心・意識を図る。
11:55	食前体操	スムーズに食事摂取ができるよう上肢 手指 嚙下体操を行う。
12:00	昼 食	栄養バランスを考えたメニューや季節感のある食事を提供し食べる楽しみを感じながら栄養の確保が出来る。
13:00	集団レクリエーション	集団でゲームや活動を行い、他者とのコミュニケーションの中で楽しみながら運動を行う。
14:00	個別機能訓練	転倒予防体操 歩行練習 (各個別機能訓練計画メニュー)
15:00	喫茶 手作業 カラオケ	コーヒー、紅茶等を飲みながら談笑やカラオケを行い、他者との交流を図る。
16:00	ラジオ体操 送り	ラジオ体操。 ご自宅へお送り。

## <年間目標>

### 利用人員

通所介護・総合事業                      平均利用人数    32人/日  
2024年1月末現在                      平均利用人数    27.7人/日  
(→内訳 要支援3.25人/日    要介護24.45人/日)  
※登録済利用者の内 2/19 現在、入院により利用中止 5名

### 目標設定の根拠

時代の流れに柔軟に対応しながらも、パーソンセンタードケアを実践し、利用者やご家族が「来て良かった」「頼って良かった」と思えるような質の高いサービスの提供に取り組み、新規利用者の獲得に努める。また、利用者の予防可能な入院に対し早期対応をとることで稼働率の上昇が見込まれる。

※パーソンセンタードケア 認知症の方を一人の「人」として尊重し、その方の立場に立って介護にあたる認知症ケアを指す。

### <目標達成の為の具体策>

#### ① 利用者満足度の向上

パーソンセンタードケアを継続して実践する為に『思いを聞く』『情報を集める』『ニーズを見つける』という3つのステップを踏む。抱えている思いを汲み取ったケアを実践することで利用者が《尊重されている》《受け入れられている》と実感でき、生きる意欲、喜びに繋げる。また、利用者とデイスタッフとの信頼関係が深まる。日頃から利用者の『希望』や『楽しみ』について伺い、できるだけそれが反映できるよう努める。※利用者やご家族・職員にもアンケートを実施し改善のヒントを得る。

#### ② 入院の予防による稼働率の上昇

管理者が利用者ごとの食事量、バイタル、排泄、言動などの情報を総合的に管理し、利用者の状態に変化があれば早期にケース検討会を行う。早期発見・早期対策を実施し予防可能な入院(転倒骨折、肺炎(誤嚥性肺炎)、尿路感染(腎盂腎炎)など)のリスクを可能な限り減らす。

《転倒骨折》利用者が歩行しやすい環境の設定。アセスメントの強化。必要に応じて見守り支援の導入など。

《誤嚥性肺炎》食事形態や水分のトロミの見直し、食事時の姿勢・車椅子のポジショニングの再確認、口腔ケアの方法の見直しなど

《尿路感染症》排泄ケア時間・方法の見直し、水分摂取量の見直しや方法の再検討など

#### ③ 加西方面利用者の新規獲得

(富田校区全域、山下町、北条町黒駒)

2023年から営業エリアを拡大。加西方面の利用者が増加してきた。

- ・新規取引居宅への営業を行い、加西エリアの利用者を獲得する。
- ・現取引居宅へ加西エリア受け入れの案内を行い利用者を獲得する。

#### ④ 介護支援専門員・地域との連携

- ・利用者や家族の意向を汲み取り、課題の把握と改善に向けたケアを介護支援専門員と密に連携をとりながら実施する。成果を出すことで介護支援専門員からの信頼を得、積極的な紹介に繋げる。
- ・送迎時等、家族や地域の方達との挨拶等、地域住民との交流を図り、職員ひとりひとりが

介護の相談窓口として対応できるよう努める。

⑤ 活気ある個別機能訓練・他者交流

- ・一人ひとりの症状、目的に合わせた個別プログラムを立案し、利用者が意欲的に楽しみながら行えるリハビリや訓練を提供することで、利用者の孤立感の解消や心身のリフレッシュ、残存機能の維持向上を図る。

⑥ 職員の資質の向上

- ・認知症、健康体操、介護技術等のDVDを回覧し各自知識を深める。利用者のニーズに即したケアとは何かを考え、それを実践する。  
(例：利用者が楽しく取り組むことができ、機能維持に効果的な健康体操。多人数ばかりではなく、個別でも楽しめるレクリエーションの提案などを日々更新する)
- ・管理者が介護福祉士資格取得への勉強会を実施。専門性を身に着け、より質の高い利用者本位のケアの実践を目指す。また、取得者数を20%増やすことで加算算定に繋げる。
- ・3Mを削減するために職員全体で業務の見直しを行い、手順や役割、マニュアルを再検討する。業務改善、効率化を行うことで利用者にとって一貫性があり円滑なサービスを提供する。職員にとっても気持ちよく働ける環境を皆で考える。

※3M 【ムリ】フロアに誰もいない時間帯があるなど

【ムラ】特定の職員への業務の偏りなど

【ムダ】慣例で実施しているが本来は不要あるいは簡略化できる業務など